

浜松中納言・松浦宮物語の地名表現について

広瀬 昌子

序

未知の土地に対する憧れの気持ちは、今も昔も変わらない。ただ、こうした土地を舞台にした物語を書く場合、作者は何を参考にして描くのであろうか。たとえば、道順、地理、風俗、天候その他いろいろな条件に関して。

平安後期の雄篇と目される浜松中納言物語、松浦宮物語は、ともに主人公の活躍舞台を中国にまで拡げている。筆者は以下に述べる諸点から、これら二つの物語作者が、中国に拡大した部分の中国の地名を示し、描写態度について、いかなる考慮を加えているかを考えてみたい。

ついで順序として、①遣唐使と物語との関係。ここでは、遣

唐使の用いた航路、渡航・帰航の時期と物語との関連性を考える。②距離に関する知識。物語上と実際との違いなどを中心に考える。③漢文作品からの影響。ここでは、一般の漢文作品中にこの二つの物語に出てくる地名が、どの程度表れているか、その影響を考える。④土地の形容。作者が実際には見たことのない土地を、どのように形容しているか。以上の四点について論を進めてみたい。

一、両物語にみられる中国の地名

両物語には、多くの中国地名（宮殿、庭を含む）が登場する。作者は、①どこから地名に対する知識を得たか。②どうしてそ

の地を選択したか。③その地名採用が、どれほど現地の実状と合致または相違しているか。まず、両物語に登場する地名を以下に列記する。(表記は五十音順とし、下の数字は、両物語における頻度数である。また、「かうやうけんの后」などの場合は、「かうやうけん」という地名とは、別個のものと考え、「かうやうけん」の

〔浜松中納言〕

- ①うむれい(雲嶺、温嶺鎮) 1
- ②えうしう(楊州) 5
- ③花山(華山) 1
- ④かうしう(杭州) 1
- ⑤かうやうけん(河陽県) 26
- ⑥函谷の關 1
- ⑦こほうだう(虚白堂か) 1
- ⑧崑崙山 1
- ⑨さんいふ(山陰) 8
- ⑩上陽宮 1
- ⑪しよくさん(蜀山) 5
- ⑫たうぐゑん 1

⑬長河

⑭丁里

⑮洞庭

⑯未央宮

⑰菩提寺

⑱蘭蕙苑

⑲れきやう(歷陽)

〔松浦宮〕

①衛

②掖庭

③河南道

④河北

⑤金城

頻度数には含まれない。また浜松中納言物語(以下、「浜松中納言」と略称)は、『日本古典文学大系77、岩波書店』を用い、松浦宮物語(以下、「松浦宮」と略称)は、『松浦宮物語、角川文庫』を用いた。浜松中納言の列記の中で、括弧中に示された漢字は、『日本古典文学大系77』の校注による。

①

5

1

1

26

1

1

1

1

8

1

1

5

1

⑥劍閣

⑦胡(の国)

⑧五鳳楼

⑨三十六宮

⑩商山

⑪湘浦

⑫蜀山

⑬長安

⑭鄭

⑮潼関

⑯未央宮

⑰巫山

⑱蓬萊

⑲明州

1

5

1

1

26

1

1

1

1

8

1

1

5

1

3

3

1

10

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

以上を概観したところ、当然ながら頻度数の高い地名ほど、物語の展開において重要地名であり、両者に共通する地名は二か所であった。

二、遣唐使の航路と時期

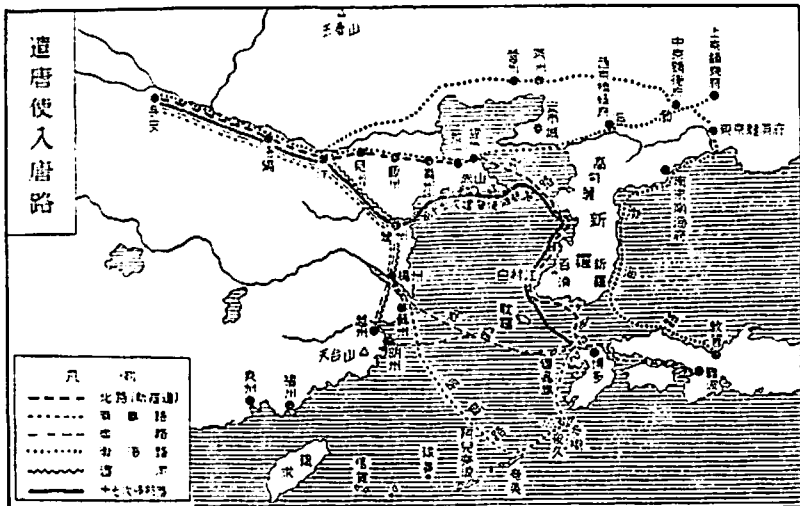
『浜松中納言』『松浦宮』では、①主人公が渡唐するのに、どのような航路を用いたか。②その時期について、作者はいかなる所から資料を得たのかについて考える。

まず海路について、物語作者は当時の遣隋使、遣唐使の利用した海路から知識を得たと考えられる。遣隋使、遣唐使の利用した海路は、森克己氏『遣唐使』（昭和三十四年六月、至文堂刊）によると、

古く遣隋使時代より利用された北路、さらに遣唐使中頃より開かれた南島路、末期に入つてとられるようになった南島路とがあつた。

という。さらに同氏は詳述して、①北路とは、

朝鮮半島の西海岸に沿って北に流れている逆転循環回流に乗って百済・新羅の領海を北上し、高句麗領海を回避するため新羅領の粟津半島のあたりより西に折れ回流を離れて



西航し、黄海を横断して整津半島と相對している山東半島登州につき、ついで萊州に入港して上陸し、ここより陸路青州—兗州—曹州—汴州（開封）—洛陽—長安（西安）に達したのである。

とし、この北路は難波船の記録などから、遣唐使初期に用いられていたと考えておられる。ついで②南島路は、

筑紫大津浦を出港してより直ぐさま航路を西にとり、肥前国松浦郡庇良島（平戸島）に寄港するかして航路を南に転じ、天草島・薩摩国の沿岸に沿って南下し、さらに多摩（種子島）—夜久（屋久島）—吐火羅（宝七島）—奄美（奄美大島）—度感（徳之島）—阿児奈波（沖繩島）—球美（久米島）—信覚（石垣島）等の島々を島伝いに次第に南下し、東支那海が比較的狭ばまっているあたりより東支那海を横断し、揚子江口地域の港に着岸するものである。

とし、この南島路は中期に用いられていたという。最後に③南路とは、

筑紫の大津浦を出帆して、肥前国松浦郡直島（平戸・五島列島）の庇良島（平戸島）・宇久島・遠賀賀島（小直賀島）・合蚕田浦・福江島等に寄港して順風を待ち、一気に東支那海を横断して揚子江口地域の楚州・揚州・明州等に

入港する航路であり、帰航もまた逆に、揚子江口地域の港から出帆し、直島島を目指して一直線に東支那海を横断するものである。

という。この南路は遣唐使後期に用いられていた。また、同氏は「三四十日、ときには数十日もかかった北路や南島路に比べると南路は比較にならないほどの短時間で渡海することが出来た。」と述べている（森氏掲載の付図—二九頁—参照）。

以上、北路、南島路、南路について紹介したが、浜松中納言、松浦宮ではどの海路を用いたのかを考えたい。

まず「浜松中納言」では、①もろこしのうむれい↓②かうしう↓③こほうだう↓④れきやう↓⑤花山↓⑥函谷の關↓⑦内裏の承願天—となつてゐる。また日本からの出発地や、日本から中国への航海の細かな記述は省かれてゐる。そこで中国着地点の、「うむれい」について考える。「日本古典文学大系77」の補注によると宮下清計氏の温嶺鎮説が有力であり、また須田哲夫氏「浜松中納言に於ける作者の唐知識論」（文学・語学 第五号、昭三二年九月刊）でも温嶺鎮だと証明されている。

温嶺とは浙江省にあり、楚州・揚州・明州など揚子江河口からは、少し南下した所に位置する。先に述べた森氏「遣唐使」と、須田氏の前出論文によつて、第十次遣唐使船で鑑真和尚は

南島路をとり出帆した際、温嶺に立ち寄ったということがわかった。温嶺という地名は、これ以外の北路、南路に見当たらない。よって「浜松中納言」では、遣唐使中期に用いられた南島路が有力であると思われる。

つぎに「松浦宮」では、①難波の浦→②大宰府→③松浦→④明州→⑤都一となっている。なお、渡唐にあたり航海中の具体的な記述は無いにしても、日本からの道筋は簡単に描かれており、この点は「浜松中納言」よりも丁寧であるといえよう。さて、この「松浦宮」の航路は、肥前国松浦郡に寄港して順風を待ち、一気に東支那海を横断して明州等に入港するという南路そのものである。また「松浦宮」の中で、松浦を出帆してから七日して陸が近くなると書いていることから、先に述べたように三四十日、ときには数十日もかかった北路、南島路にくらべ、短時間で明州に到着している。これらから、「松浦宮」では遣唐使後期に用いられた南路が有力であると考えられる。

さて、日本と中国とを往復する時期を考えると、季節風の知識は欠くことができない。作者はその点に関し、どれほどの知識を持ち得たか、ここで渡航時期について考える。前出の森氏「遣唐使」によると、「平安時代わが国に来航した中国船について、その来航の季節を統計としてみると、陰暦の七月が

最も多く、」とあり、また「博多より本國へ帰航する時期は三・四月及び八月ごろが最も多数を占めている。」さらに「来航の際は、日本や揚子江口を吹き渡っている南島風を利用し、帰航の際は、北西風を利用している。」という。このように中国船は、季節風に順応し、その知識を持って日本—中国間を往來していた。

一方、我が国の遣唐使はどうであったか。同氏は、我が国の遣唐使が「南東風の盛んに吹いている六・七月頃に船出して帰航が多く、これでは逆風を冒して渡航するわけで、みすみす死地に赴くようなものである。」とされ、さらに同氏の指摘によると、逆風を衝いて出航した遣唐使船が、ほとんど例外なく毎航遭難しているという記録からも、我が国の遣唐使は季節風と渡航時期の関係について無知であったのだろうといわれる。では、両物語における場合はどうか。

「浜松中納言」渡唐 「もろこしのうむれいといふ所に、七月上の十日におはしましつきぬ。」(大系本 一五三頁) 帰国 「歸らんことは、九月晦日と定めらるゝに、」(同 一九五頁)

「松浦宮」渡唐 「四月十日あまり、ふなよそひしたまふ。」(角川文庫本 一九頁) 帰国 「七月十五日ふなでして、」(同 一一五頁)

となつてゐる。「浜松中納言」では、「七月上旬の十日」に唐に着いている。先に「浜松中納言」は南島路を用いたと述べたが、南島路は三四十日、時には数十日もかかったというから、出発は六月中旬から下旬頃だつたであろう。そうして帰国は「九月晦日」となつてゐる。まず出発の六月中旬、下旬頃というのは先に述べた通り逆風を冒しての渡航である。また帰国の九月晦日というのも、ちょうど日本や揚子江口では北西風の吹く頃で、これも逆風を冒しての帰航となる。もつとも「浜松中納言」の作者は、季節風に対して無知であつた故にこのような記述をした、というよりも、当時の我國の遣唐使船が、先に述べたように六・七月頃の船出が多く、秋の帰航が多かつたので、作者も当時の遣唐使船の渡航・帰航時期に忠実に物語を書いた。ひいては作者が物語を書くにあたり、史実としての遣唐使船の配船時期をよく調べていたということが立証されよう。

つぎに「松浦宮」では、「四月の十日あまり」に出航し、「七月十五日」頃に帰航してゐる。我國の遣唐使船は季節風の知識を欠いていたために、わざわざ逆風を冒して航海してゐたのだが、中国商船は季節風に順応し得る知識を持つてゐた事は先に述べた。そして中国商船の航海時期は、日本から中国へは七八月か三・四月頃。中国から日本へは七月頃であると述べた。

「松浦宮」の航海時期は、この中国商船の航海時期と正確に一致する。すなわち「松浦宮」の作者は、当時日本で用いられてゐた航海時期よりもむしろ中国商船を参考にしたのではないかと考えられる。

逆風の中、南路を選んだものは、ほとんどが遭難してゐるという記録がある。こうした事実に対し、なにの困難もなく中国へ着くというのは、たとえ物語の上とはいつても余りにもその実状とはかけ離れたものとならう。あえて中国商船を参考としたところに、作者の細かな配慮と、豊富な知識がうかがえる。

以上、こうした両物語における渡航・帰国の時期について考えると、まず「浜松中納言」の作者は、当時の遣唐使船の渡航・帰国の時期を、そのまま自作の物語に表わしており、一方の「松浦宮」は、季節風を配慮した中国側の配船事情をよく考慮した筆致を示している。こうした点にも、両作品における作者それぞれの著しく異なつた姿勢が見られよう。

三、距離に関する知識

「浜松中納言」「松浦宮」に多くの中国地名が出てくることは先に述べた。ここでは、それぞれの物語において主人公が、

A地点からB地点へ行くのに要した距離と時間(日数)との関係について、その妥当性を考えたい。まず、人が一日に進み得る距離について。

①源氏物語・須磨の巻に、光源氏が須磨へ移る記述の中で、京を「三月二十日あまりの夜深く」出発し、須磨へは「まだ申の時ばかりに」着いている。恐らく光源氏は、京から難波浦まで出て、あと船で須磨へ行ったと考えられるが、その直線距離を「日本歴史地図」(全教図)で測ると、約十三里、五十二キロメートルとなる。申の時とは午後四時前後であるから、光源氏は二十六時間〜二十八時間で、約五十二キロメートルを進んだことになる。

また時代は下るが、
②日本風俗志(上)によると、「此の時代(私注―江戸)の旅行は便利になったとは云ふものの徒歩か馬か駕籠かで、東海道は十日中仙道は十二日が普通の行程であったが」とある。東海道は全長百二十五里二十町(約五百キロメートル)であるので、計算すると一日に約五十キロメートルとなる。

ついで早馬の場合だが、
③平家物語、巻第五・早馬によると、大庭三郎景親は九月二日に早馬で、衣笠の合戦(八月二十六日)の報告を福原でして

いる。相模から福原は、「日本歴史地図」によると直線距離にして約四百二十キロメートルであった。「平家物語全注釈・中巻」(角川書店)の中で、富倉徳次郎氏は「はたして二日に早馬があつても『平家物語』に記してあるように、衣笠の合戦までが報告されたかは疑問であり」と指摘されているが、あえて報告し得たと仮定すると、早馬の一日に進んだ距離は約六十キロメートルである。

以上①②③により、一日ほぼ五十キロメートルを一つの単位とする。表④⑤本稿末尾に付載は、「浜松中納言」および「松浦宮」において距離と時間(日数)を示したものである。ここでは、「中国古今地名大辭典」(商務印書館刊以下「大辭典」と略す)で場所をおさえ、「日本歴史地図」(全教図)でその直線距離を出した。

この表を合わせ考えるに、七月の上の十日に温嶺鎮に着き、長安まで約二十九日要している。とすれば、八月上旬から中旬頃に長安に入京したことになる。「八月十日餘日、中納言のおはするかうそうのまへの前裁、ことにおもしろく見渡せば」(浜松中納言)とあることから、温嶺鎮から長安までの距離と時間(日数)の記述は、ほぼ正確であるといえよう。道順は全く逆になってしまうが、「入唐求法巡礼行記2」によると、円

仁は長安から揚子江河口の泔州まで三十四日を要している。約一ヶ月。これは「浜松中納言」の約二十九日という日数に大体一致する。このことから、本文記述と実状との一致も証明でき得るのではなからうか。

ともあれ以上二つの表を比較すると、①「浜松中納言」、「松浦宮」の両作者は、いずれも中国に着いてから長安入京までの距離と日数を、ほぼ正確に記している。その点、両作者の手に、遣唐使を中心とした何らかの資料があったことが推測される。しかし②両作者とも、長安入京後の主人公の行動における記述は、不正確さが目につく。不正確であるにもかかわらず、物語の展開範圍を広くとつたのは、「浜松中納言」である。「浜松中納言」では、主人公が東西南北と様々の地に移動する。読者にとつても異国情緒を十分に満喫でき得るであろう。一方、「松浦宮」では展開範圍は狭く、主人公は限定された場所を移動しているにすぎない。異国を舞台にしているという強い印象は受けない。また③「浜松中納言」の作者は、ストーリーだけではなく、中国という場所にこだわって、物語を描いていると思われ、一方の「松浦宮」作者は、物語の展開場所を中国にしたというのみの、ストーリー中心の描写態度がうかがえよう。

四、漢文作品からの影響

「浜松中納言」、「松浦宮」の両作者は、物語に出てくる中国地名の知識をどこから吸収し得たのか。作者が、中国地名を知り得た源泉として、平安時代の漢文作品に注目してみたい。表⑥は、「平安朝漢文学総合索引」（吉川弘文館）における、「浜松中納言」、「松浦宮」に出てくる中国地名の一覧表である。

この表を見れば、作者らがその地名の知識を主として平安前・中期の漢文作品から吸収し得たことは明白であろう。萩谷朴氏は前に引用（前項、表⑥の注②）した論文の中で、白氏文集などから影響を受けている部分を指摘している。また、物語にあつて表中の漢文作品には見られないものも少数あつた。しかし、これらの地名も、先の表中の漢文学に見られなくとも、他の漢文作品中に見られたり、歴史的に有名な地であつたりして、作者が何らかの方法で知り得たのであろうと推測できるものばかりであつた。「浜松中納言」、「松浦宮」ともども、作者が独自に創り出した架空の地なるものは、一つとして見当らなかつた。

五、地名の形容について

つぎに、この二つの物語作者は、自分が実際には見たことのない地を説者に紹介するのに、どのように形容しているのか、それぞれ該当本文を引用しながら考えてみたい。なお、ここでは形容のあつたもののみを挙げ、五十音順とする。

表①②によると、「松浦宮」より「浜松中納言」の方が、形容している地が多いと分かる。また「松浦宮」では簡潔に形容されているのに対し、「浜松中納言」では、日本の地名を例にしたりして、工夫して形容している。松尾聰氏は論文の中で「浜松中納言」について、「その描写が到底夢にも支那を見きた人とは考へられぬ程あまりにも貧弱すぎ、あまりにもありきたりすぎるとは思はれる事である。」(同氏「浜松中納言物語に於ける唐の描写について」、「文学」昭和八年十月号)とある。しかし、「浜松中納言」、「松浦宮」を比較する限りでは、むしろ「松浦宮」の方がありきたりすぎる描写だと思われる。描写がたとえ非写実的であるにしても、「浜松中納言」の方が、異国を舞台にしていると感じられ、中国という場所にこだわって物語を描いている。「浜松中納言」の作者と、それにはこだわら

ず、むしろストーリー中心の「松浦宮」の作者と、以上二人の作者の異なる描写態度を、ここに見出すことができよう。

結語

以上、中国を舞台とした「浜松中納言」、「松浦宮」について、いろいろな観点から考えてきた。まず①物語の航路と遣唐使の航路の関連を見た結果、「浜松中納言」は、遣唐使中期に用いられた南島路、「松浦宮」は遣唐使後期に用いられた南路を、それぞれ参考に行っていることが判明した。つぎに②渡航、帰航時期について、季節風などと関連づけて考えた結果、「浜松中納言」では、当時の我国の遣唐使船の渡航、帰航時期と一致していることがわかり、「遣唐使」を考慮して物語を描いたことが明白になり、一方の「松浦宮」では、当時の中国商船の渡航・帰航時期と一致し、作者の豊富な知識がうかがえた。

さらに③距離と時間(日数)について、作者がどの程度の知識を持っていたのか。「浜松中納言」、「松浦宮」ともに、唐地着から長安着までの日数は、遣唐使の記録などから、ほぼ正確に描かれていると分かったが、長安からの移動については、どちらの物語も不正確が目についた。主人公の行動範囲は、

「松浦宮」よりも「浜松中納言」の方が、広く描かれているということもわかった。ついで、④作者は中国地名の知識をどこから得たのかを考え、これを平安初期・中期を中心とした漢文作品の中に求めたところ、ほとんどをその作品に見つけ得た。ひいては、作者がその知識を、こうした漢文作品から吸収し得たと考えてよいのではなからうか。「浜松中納言」、「松浦宮」とともに、作者が独自で創り出した架空の地名は一つとして見当たらなかった。また最後に⑤作者が舞台となる異国の土地を、どのような言葉で表現しているかを調査してみた結果、「浜松中納言」の方が、「松浦宮」よりも形容している地名が多く、また形容している内容の表現密度が「濃い」と分かった。

以上、諸点にわたって検証し、考察を加えてきたが、同じ中国を舞台にしても、二つの物語の作者には、時として対照的ともいえるほど、描写態度に違いがあった。つまり「浜松中納言」の作者は、中国という異国を舞台にしていることを重視して描いている。一方の「松浦宮」の作者は「中国」には特にこだわらず、読者に対して「中国を紹介する」というような意識を感じさせない。中国を舞台としたことにより、「浜松中納言」の作者は、物語の展開よりもむしろ異国趣味、ひいては「読者の目新しいものへの要求」に応じることに成功したの

ではなからうか。また「松浦宮」の作者は、そうした趣味、趣好の目新しいさを追求するのではなく、物語のストーリー性を重視して、その粹取りが広く展開し、立体的になることに成功し得たのではないか。当時入手可能であった限りの情報を知識の源とし、同じ中国を舞台として描かれたこの二つの物語ではあるが、地名表現を通して、作者の異なる描写態度を見出すことができると思う。

付記 文中にも記したが、表④⑤はまとめて拙稿の末尾に付載してある。組版の事情もあり、そのことを了とされたい。

④ 浜松中納言における距離と日数

本文の抜粋			③ ころぼうだうにつき給。
ページ	153	153	153
地名説明	<p>「うむれい」とは、温嶺鎮を当てはめるのが定説となっている。温嶺鎮とは、『中国古今地名大辞典』（商務印書館）によると、「左浙江温嶺縣西北十五里温嶺下」と書かれている。</p>	<p>「かうしう」は、杭州で、前述の大辭典では、「風浙江省治」と書かれている。</p>	<p>須田哲夫氏は、黄浦江ではないかと考えているが（注①）、私もその意見に賛したい。須田氏は特に、次の歴陽への道</p>
距離と時間（日数）	<p>温嶺鎮 陸地の直線距離で約二五〇*。本文には何日かかったという記述なし。最低でも五日は要したであろう。</p>	<p>杭州 直線距離で約一二〇*。本文には何日かかったという記述なし。約二日は要したであろう。</p>	<p>黄浦江 直線距離で約一三〇*。</p>

	④れきやうといふ所に船とめて、	④それより花山といふ山、峰高く谷深く、はげしき事がぎりなし。
	153	153
筋の問題についての面からその事を裏付けているが、私は大辭典で、「多由此江之交通便利而發達」とあることに注目した。大辭典ではさらに、「在浙江興縣西南二十八里」とある。	「れきやう」は歴陽で、大辭典によると、「即今安徽和縣治」とある。	花山は「日本古典文学大系77」の松尾騁氏の校注によると、華山を当てはめているが、須田氏によると、「いづれも陝西、江蘇、江西、湖南の諸省に在って主人公の函谷関へ行く順路として不適なものばかりであった」(注①)とあり、むしろ花山を当てはめるのを重視している。花山とは大辭典によると、「在河南沁源縣南六十里」とあり、沁源縣とは、「中国地名辞典」(外務省情報部編)によると、「河南省西南部」とある。
← 本文には何日かかったという記述なし。約三日は要したのであろう。	← 歴陽 直線距離で約三〇〇 ^マ 。 本文には何日かかったという記述なし。約六日は要したのであろう。	← 花山 直線距離で約五〇〇 ^マ 。 本文には何日かかったという記述なし。約十日は要したのであろう。

<p>⑤ 函谷の關につき給ひて、日暮れぬれば、關のもとに泊り給ひぬ。</p>	154	<p>「函谷の關」は、大辭典によると、「在河南靈寶縣西南里許」とある。</p>	<p>函谷の關 直線距離で約一五〇*。 本文には何日かつたという記述なし。約三日は要したであろう。</p>
<p>⑤ 明くる日、この關に御迎への人々まいたりたり。</p>	154		<p>← 内裏（長安）</p>
<p>⑥ 大里の邊近く、かうやうけんといふ所に、面白き宮造りして、そこをぞ御里にし給へる。</p>	156	<p>「かうやうけん」とは大辭典によると、「故城在今河南孟縣西三十五里」とある。</p>	<p>長安からかうやうけんまでは、直線距離にして約二〇〇*。約四日は要したであろう。邊と呼ぶには少々難かしい。</p>
<p>⑦ 十月一日、ほかよりもみちのさかりすぐれたる、内裏の西に、とうていといへるところに、御門みゆきしたまひ。</p>	158	<p>「とうてい」とは洞庭のことで、恐らく洞庭湖のあたりであろうと推測できる。大辭典では、「在湖南境」とある。</p>	<p>洞庭 十月一日に洞庭へ御幸し、その次の日の夕方には、河陽県へ到着している。この距離は直線距離で約</p>

<p>⑩三日といふよさり、丁里といふ</p>	<p>⑨内裏のほど一日ばかり去りて、 さんいふといふ所に、みそかに 渡り給ひぬ。</p>	<p>⑧その又の日、「御子かうやうく ゑんにいで給ぬ」ときつて、ま いり給へれば、風すさまじき夕 べに、時雨ときぐうちそく ほどのむら雲立ちわたりて、心 ほそげなる事かぎりなし。</p>	
<p>181</p>	<p>176</p>	<p>158</p>	
<p>丁里については、須田氏は、「漢江に臨む前漢の旧都で、</p>	<p>「さんいふ」とは山陰のことで、大辭典によると、「故城 在今山西山陰縣西南」とある。また「中国地名辞典」によ ると、「山西省北部、大同の西南方」とある。</p>		
<p>長安から丁里まで直線距離</p>	<p>内裏即ち、長安からさんい ふまでは直線距離で約六二 〇*。約十二日は要したで あろう。例え早馬でも内裏 を一日ばかり去りて到着す るのは不可能。</p>	<p>河陽県 ←</p>	<p>六一〇*。約十二日は要 したであろう。例え馬を 走らせても、一日二日で 到着するのは不可能。</p>

所は、日の本の西の京なり、そこへおはして、

長安の西に在る」(注①)といふ事を証明している。

で約三〇〇^{マイル}。約六日は要するであろう。三日といふよさりで到着するのは不可能。

注①—須田哲夫氏「浜松中納言物語に於ける作者の唐知識論」(文学・語学 第五号 昭三二年九月)

⑥松浦宮における距離と日数

本文の抜粋	地名説明	距離と時間(日数)
<p>①四月十日あまり、ふなよそひしたまふ。</p>		<p>松浦 この部分は先に述べたように、南路を使用したため、七日という短時間で到着し得たであろう。</p>
<p>②七日といふにぞ「ちかくなりぬ」とて、うらの気色はるかに</p>	<p>明州とは大辞典によると、「在今浙江鄞縣東」とある。また、萩谷朴氏は論文(注②)の中で、「『めいしう』は古來</p>	<p>明州 直線距離で約一二一〇^{マイル}。</p>
22		
19	ページ	

	<p>④ 八月十三日の月くまなくすみのぼりて、三十六宮まことにのこるくまもなくおもしろきに、</p>	<p>③ はるかにとほき山河、野はらをすぎゆけばさびしき道、さがしき山をこえつづゆくに、五月の雨はれず、いとどかさやどもわづらわしけれど、みやこにまゐりぬれば、</p>	<p>みえ、いはのさまなべてならずおもしろき。その夜、明州<small>めいしゅう</small>といふ所につきて、</p>
26		23	
	<p>三十六宮とは『松浦宮物語』（角川文庫）の萩谷朴氏の注によると、「長安城内三十六の離宮をいう。」とある。</p>	<p>みやことは長安のことである。</p>	<p>有名な遣唐使の南方航路の上陸地点であつて今の浙江省寧波の地を云ふ。」と述べている。</p>
<p>← 三十六宮 三十六宮から商山は、直線距離で約一〇〇⁺。約二日は要したであろう。</p>		<p>長安</p>	<p>← 約二十四日は要したであろう。四月の中旬に明州に着き長安には五月雨の頃、即ち五月中旬に到着している。約一ヶ月。この部分はほぼ妥当である。</p>

<p>⑥のころでどもひきつくしたまひて、れいのあけがたになりぬ。</p>	<p>⑥くれもはてず、れいのまどひいでぬ。樓のけしきかはれることなり。</p>	<p>⑤あけはてぬさきにといそぎかへれど、己の時ばかりにぞうちやすみ給へど、身には心もそはずながめられて、</p>	<p>⑤くれもはてぬにいそぎいでて、さきしかたにたづねゆく。いみじきむまをいとどうちはやめつづ、夜中にもなりぬらむとみゆるほどに、おなじごとたかき樓のうへに、琴のこゑきこゆ。</p>
<p>35</p>	<p>35</p>	<p>33</p>	<p>31</p>
		<p>夜の明け離れぬ前にと、商山から長安へ急いで帰ったというのである。</p>	<p>たかき樓とは商山のことである。商山は大辭典によると、「在陝西商縣東」とある。</p>
<p>商山 ← 三十六宮 ④ ↓ ⑤ ↓ ⑤に同じ</p>	<p>商山 まだ暮れきれない頃に出発して、夜中に到着するのは不可能であろう。また、夜の明け離れぬ前に帰路につき、午前十時頃着くというのも不可能であろう。</p> <p>三十六宮 ←</p>		

凌雲集	書名	浜松中納言物語		松浦宮物語	
	地名の数 (同一地名は一とする)	2	のべ総数	4	のべ総数

注②—秋谷朴氏「松浦宮物語作者とその漢学的素養」(国語と国文学 第十八巻九号)
 ◎ 平安期漢文作品にみられる浜松中納言、松浦宮の地名一覽

⑦三日といふに、みやこにいり給はむとす。	61	
		(蜀山を出てから)三日目という日にみやこ(長安)にはいりになろうとする、という描写である。蜀山とは「松浦宮物語」(角川文庫)萩谷朴氏の注によると、「蜀は蜀漢の地。今の四川省成都を中心とした範囲をいう。故に蜀山とは、揚子江の支流たる嘉陵江、涪江及び漢江等の水源地帯の山脈をいう。極めて峻険にして古来要害の地として聞こえていた。」とある。
		蜀山から長安までは直線距離にして約六〇〇 ⁺ 。約十二日は要したのであろう。「要害の地として聞こえていた」所なら、三日というのは当然不可能であろう。

都氏文集	性靈集	和漢兼作集	鳩嶺集	本朝無題詩	紙背漢詩集	中右記部類	本朝麗藻	扶桑集	經国集	文華秀麗集
1	1	6	3	3	3	3	3	2	3	2
1	3	10	3	6	4	3	3	2	3	5
1	3	5	3	7	2	1	5	5	4	5
1	4	10	5	28	4	1	8	8	10	11

天德三年 八月十六日	雜言奉和	類聚句題抄	新撰朗詠集	泥之草再新	和漢朗詠集	作文大体	関白御集	法性寺	江吏部集	菅家文章
1	1	2	5	3	3		1		6	1
1	1	2	10	3	3		2		7	1
1		2	4	3	4	3	2		5	4
2		2	6	4	10	5	2		7	7

新猿蓑記	三十五文集	詩序集下	本朝文集卷 十一、六十一	本朝統文粹	本朝文粹	資夷長兼 兩御百番詩合	殿上詩合 天喜四年 六月	善秀才宅詩合	關詩行事略記
1	1	1	4	8	8	1	1	1	
1	1	1	4	14	20	1	1	1	
	1	2	4	11	9	3			
	2	4	4	30	27	5			

地名	ページ	形容
①かうしう	153	入江のうみにて、いと面白きにも、石山のおりの近江の海思ひ出られて、
②かうやうけん	156	所のさま、ほかよりもいみじくめでたく水の色、石のたたずまる、庭の面、楢のけしきもいみじう面白し。
③花山	153	峰高く谷深く、はげしき事かぎりなし。
④こほうだう	153	いと面白くて、人の家ども多くて、日本の人過ぎ給とて、家くの人出で、見さはぐさまともいとめづらし。

① 浜松中納言に於ける地名形容

明衡往来	高野雜筆集	朝野群載 第一〜三・十三
		2
		2
2	1	3
2	2	4

⑪未央宮	⑩丁里	⑨長河	⑧たうぐゑん		⑦そくさん	⑥さんいふ	⑤崑崙山
195	181	186	169	228	188	177	440
日本にとりては、冷泉院などいふ所のやうなり。池十三有て、めでたくおもしろき事たぐひなきに、	日本の本の西の京なり。	住み馴れにし國の大井川、宇治川などのやうに、はやく大きなる川なり。	岸にそひて、ひとへにもゝの木のはるぐゝとうるはしく並み立ちて、ひらけ渡りたるさま、目もあやな り。	所のさま、山と海と帯びたり。	山のさま高くはげしくて、瀧の落つる水のながれ、草木のなびきもよのつねならぬさまに、	ながめ入つゝ、水のほとりにそひておはすれば、人の家どもところぐゝに見ゆ。	髪をそぎ、衣を染て、ふかき山に入りぬ。

④ 松浦宮に於ける地名形容

地名	ページ	形容
① 剣閣	48	剣閣のさがしきをたのみて、
② 剣閣あたり	51	深き山にいらて、いはをこえ木のねをふみてまどひゆけば、かたきにむかはぬさきに、おちいりしぬるものもおほかれど、めぐれる山のまへははるかなる海づらの、又道もなきを見おきて、
③ 三十六宮	26	まことにのこるくまもなくおもしろきに、夜はことなるめしなくてまるることなし。
④ 商山	31	これはかがみのごと光をならべ、いらかをつらねてつくれる物から、やかずすくなく、かりそめなるやに入すむべしとみゆれど、
⑤ 蜀山	48	蜀山のはるかに、